

六甲山ボランティアガイド養成講座

2024年10月5日

登山道の歩行とガイディング基礎

1. 3 グループ登山の行動

登山は単独行でない限り、複数の人で行動するわけですが、その場合は必ずリーダーが必要となります。但し、全てをリーダーに頼るのではなく、メンバーの一員として役割を分担し、協力をすることが大切となります。

1. 4 リーダーとメンバーの役割

リーダーにはリーダーシップが大切ですが、一方メンバーもメンバーシップが必要です。メンバーひとりひとりがリーダーに協力してチームとしての行動を大切にすることが重要になります。

チームワークの良し悪しはメンバーシップにかかっています。

リーダーには以下の役割が求められます。

- (1) 出発前にメンバーの点呼、体調および装備（雨具等）の確認を行う。
- (2) メンバーの経験、体調により歩く順番を決める。
- (3) 天候、道の状況等により、パーティーの編成を柔軟に決め安全に配慮する。
- (4) パーティーがばらばらにならないように注意する。
- (5) 休憩の指示を出す。
- (6) 天候変化、道の崩壊、パーティーの状況などにより危険が予見される場合はコースを変更するなどの判断を行う。
- (7) トップが道を間違えた場合は、確認するように指示を出す。
- (8) 不幸にして事故に遭遇した場合には、メンバーを落ち着かせ、励まし、無事安全に下山する方向に導く。

1. 5 山の法的責任と損害賠償

インターネット等の情報収集が容易になったことから、登山における事故や倫理問題などが訴訟問題に発展する時代になってきました。

責任者(リーダー)は、常に法的責任が存在する事を認識しておく必要があります。

(1) 法的責任

登山における法的責任の主なものとしては刑事責任と民事責任があります。

刑事責任としては業務上過失致死罪などが考えられますが、もっとも問題になるのがリーダー的な立場にある者の民事上の損害賠償責任になります。

従来の登山事故では“好きな山での事故は本望” “グループの先輩、後輩の関係は訴訟問題とは無関係” という考え方が通用しましたが、プロ・アマに関係なく理由を問わず訴訟問題に発展する時代です。

(2) 注意義務

損害賠償責任の前提となる注意義務として、安全配慮義務や安全を確保する義務があります。

注意義務を課す前提としては、事故の危険に対する予見可能性の有無によって損害賠償責任が左右されます。

登山はもともと危険を伴うスポーツですが、登山中の危険性は絶対に予見できないわけではありません。ほとんどの山岳事故について検証すると、多くの場合で人間の判断ミスが認められるため、過失と認定することはそれほど困難ではありません。

それゆえに、登山には本質的危険性があり、予見は不可能ではないものの、事故防止対策には限界があることを理解した上で登山活動を行う必要があります。

従い、このような講習を受講するなどして知識と経験を積み、資格を持った上で、習得した注意義務を果たすことが望まれます。

(3) 登山における必要な保険等

- ① 傷害保険 … 自分のケガでの入院、通院費用のための保障。
- ② 損害賠償保険 … 石を落として他人にケガを負わせた場合などの保障。
- ③ 捜索救助保険 … 遭難時の救助隊費用や救助ヘリ費用などの保障。

はじめに

1 UIAA 準拠上級夏山リーダーについて

1.1 2タイプの登山リーダー定義

登山には、自主型登山と引率型登山の2タイプがあります。前者は、山の仲間同士の登山で、同じ程度の技術、登山知識を持っているような場合、後者は、学校登山で、教師が生徒の安全に責任を持って指導するような場合です。

JMSCAでは、この2タイプの登山形態のリーダーについて、前者を「JMSCA 公認夏山リーダー」、後者を「UIAA 準拠上級夏山リーダー」と呼称しています。一方、登山形態から習慣的に、前者を「自主型登山リーダー」あるいは「取りまとめ型登山リーダー」と呼び、後者を「引率型登山リーダー」と呼ぶ場合もあります。以下に、より詳しく定義します。

(1) JMSCA 公認夏山リーダー

パーティーの構成メンバーがリーダーと同等の登山知識・技術を持ち、危険を予知することができる場合で、リーダーとしては、技術的指導もしますが、仲間同士の取りまとめ、世話役を主な役割とします。

(2) UIAA 準拠上級夏山リーダー※

パーティーメンバーの登山技術や知識・経験が浅く、危険の予知、回避能力が十分でない人々を技術・心理的にサポートし、さらに、環境問題に配慮した指導を行い、目的を達成する登山リーダーです。初心者指導、学校教師、各種講習会コーチなど責任ある立場で指導する人が該当するボランティア・リーダー※です。

UIAA など世界の登山界が考える「登山リーダー」は、この「UIAA 準拠上級夏山リーダー」に該当します。UIAA では、「リーダーとは、他の人に責任を持ち、登山活動を主導または監督指導できる人 / A leader is a person who can take responsibility for other people and lead or supervise an activity.」と定義しています (UIAA Mountaineering Commission, 2015)。

1.2 リーダーの資質

リーダーに求められるのは、リーダーとして様々な危険に意識を向けながら、登山への情熱と寛大なチームスピリットを持っていることです。自然環境保全への造詣が深く、メンバーに地形や植生、天候などの知識を基に、自然が如何に破壊されやすいものであるか指導し、注意喚起しなければなりません。

登山計画において、選択したルートや参加メンバーに見合った知識、技術的能力そして心理的対応技術を持っていなければなりません。常に、パーティー全体に気配りし、メンバーにも、危険に対し意識を向けさせる指導的配慮が必要です。



図 1.1

1.3 リーダーがしなければならないこと

まず、構成メンバーの能力を把握しなければなりません。リーダーやメンバーの能力に応じたルートを選択し、必要な装備を伝えます。この際、メンバーとよく話しあい、不安を取り除く必要があります。メンバー能力の向上を目指して、常に、登山計画段階より参加させ、設定ルートに基づいた必要装備を準備させなければなりません。

山行中、メンバーの体調や天候悪化など状況次第ではルートの変更が必要になりますが、必ず、参加者へ説明が必要です。

危険な場所では、メンバーが安全に動けるように技術的・心理的なサポートを行い、もし、メンバーが事故に至ると、救助活動が求められます。

山行後、リーダー体験を振り返った反省と、何らかの問題があれば批判を受け入れることが必要です。

(1) リーダー責任について

登山環境は異なりますが、登山におけるリーダーの責任は、世界共通の考え方があります。以下に10点(①~⑩)に箇条書きします。

リーダー責任とは

- ① リーダー訓練で得られた知識(そこで経験し、得られた能力)の範囲内の活動であること
- ② リーダーは安全方針に従っていることを明確に主張すること
- ③ リーダーとメンバーの構成は、安全比率の範囲内であること
- ④ リーダーは常にグループの安全を確保すること
- ⑤ リーダーは常時リスク・アセスメントを行うこと
- ⑥ リーダーはメンバーが加入している保険の内容に注意すること
- ⑦ リーダーは他の登山者への心遣いすること
- ⑧ リーダーはグループ・メンバーの教育を行うこと
- ⑨ リーダーが登山計画し、準備すること
- ⑩ リーダーは登山文化、自然保護の語り部であること

1.4 リーダーが引率する集団の形成と問題点

(1) パーティー内の雰囲気作り

リーダーが引率する集団登山の第一歩はパーティー・メンバーが知り合うことです。

初対面の人同士が会おうとき、緊張をほぐすための手法をアイスブレイクと呼びます。

まずは、全員の自己紹介から始まり、メンバーの名前を覚え、山行に参加した理由、目的などを話していると、パーティー内の雰囲気作りがやりやすくなり、リーダーも目的の達成ができます。メンバーには、「例えば；集団での歩き方」など、簡単な山行目的を設定させます。熱意のあるメンバーに役割を割り振ることも大事です。もし、メンバーに、礼節を欠く行為や、安全に問題がある行動に対して、臨機応変にはっきりとした態度で臨む必要があります。



図 1.2

熱意のあるメンバーに役割を割り振ることも大事です。もし、メンバーに、礼節を欠く行為や、安全に問題がある行動に対して、臨機応変にはっきりとした態度で臨む必要があります。

(2) 様々なパーティーメンバーが作り出す人間関係の問題点を知っておこう

パーティーが多種多様な人々で構成される以上、それぞれのパーティーも集団としての個性を持っています。技術習得に熱心なパーティー、注意深く行動するパーティー、やる気の無いパーティー、大胆で無謀な行動が多いパーティー、など様々なタイプがあります。リーダーも、メンバーと同じように影響は避けがたいですが、安全第一に、登山計画に沿った形に、目的遂行するには、まず、パーティーの持つ雰囲気把握する必要があります。そして、山行中、集団行動で陥りやすい問題点について認識・理解しておくことが必要です。

(3) 集団がもたらす思い違い

パーティーメンバーはその数が多くなるに連れて、メンバーの持つ技術・知識が増すと幻想を抱き、安全と思い込む傾向があります。反面、リーダーにとって、メンバーが4人以上になると責任が曖昧になると言われています。リーダーは、そのような幻想的な思い込みを抱かないように気をつけなければなりません。そのためにも、メンバーに役割分担させることが重要です。

(4) 船頭多くして船山に登る

指示をする人が多く、方針、行動指針が決まらない結果、見当違いの方向に進む有名なたとえです。

パーティーにリーダーが何人が存在するとき、あるいは、リーダーなみに技術レベルが高いメンバーが複数存在すると、このような現象が煩雑に起こります。何か、判断しなければならないとき、責任の所在が曖昧になり、十分に話し合わないまま判断し、いきあたりばったりのルートが選択される結果、事故に至る場合もあります。このような状況下において、リーダーは、パーティーの安全性に関わるリスク対応の判断時に、特に注意しなければなりません。

(5) 山行に影響するパーティーからの圧力

パーティーに参加するメンバーは、体力、知識、経験などが異なり、それぞれが独自の参加動機を持っています。パーティーを構成する段階で、なるべく、メンバーの参加動機を知っておくことが重要です。高山植物に関心を抱く人、有名な山の制覇を目ざす人、健康のために参加する人、病気を抱える人など様々です。この人たちの考え方の違いは、当然、リーダーにパーティーメンバーからの圧力として、山行行動に影響を与えます。リーダーは、

これらの点を踏まえて統率しないと、山行中にパーティーが分離してしまう可能性があります。

(6) 友好関係と危険回避の葛藤 (かっとう)

リーダーはパーティーと友好的な関係を築こうと努力します。そして、ある程度、友好的な関係が成立すると、その雰囲気を持続しようとします。しかし、天候の変化、危険箇所への侵入が予想されると、それを回避するために、友好関係を壊さなければならない場合もあります。時折、学校関係クラブなどの引率集団に見られるトラブルケースです。当然、良好な関係のムードを壊したくないという思いに逆らって判断しなければなりませんので、リーダーにとって、リスク予測の精度や根拠が判断材料になるでしょう。

(7) リーダーがサポートできるパーティー数について

引率型の上級リーダーの特徴が最も現れるのは、リスクに対応した場合です。イギリスのリーダー

(Mountain Leader) では、リーダーとメンバーの構成比率は (リーダー & サブリーダー) : (メンバー) = 2 : 14 とされています。この比率は、通常の安定した山行の場合で、登山コースの難易度や環境変化によ

って、大きく変化します。例えばリーダーになるだけの能力を持っている者でも、荒天時の対応、メンバーの負傷・疾患、危険箇所のサポートなどの作業が増えていくと、自身への負荷も増加します。概念図に描くと、リスクの増加による自身の問題とサポートできるメンバー数は、相反する対応を示す結果、リーダーとメンバーの構成の比率差が小さくなっていきます。8人が亡くなったトムラウシ遭難事故では、まさに、この図 1.3~1.4 のような事態となりました。

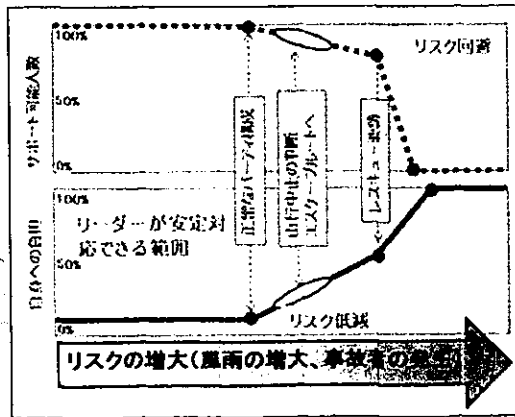


図 1.3 リスク増加に伴うサポート能力の低下

このような事態に対応するには、常日頃より、様々なケースを想定し、どの程度のリスクがかかると、低減、回避の意思決定をするのか、訓練しておかないと、事故対応ができません。その節目には、予定山行の開始と中止判断、関係者への連絡、エスカープルートへの変更、警察への連絡、救助要請、回避行動開始などがあります。さらに深刻な事態として、リーダー自身が事故を起こす、体調を崩す場合もあります。

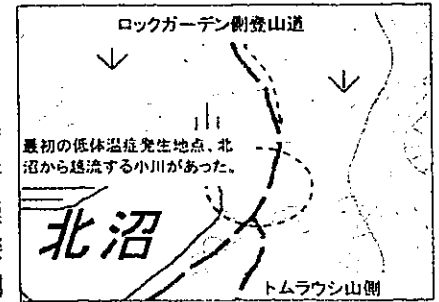


図 1.4 トムラウシ事故現場

(8) 大事故につながったリーダーの意思決定のタイミング

(2)~(7)では、リーダーとパーティーメンバーとの間に生じる人間関係の問題点について、特徴的なケースを紹介しました。多くのリーダーが経験する、ごくありふれたパーティーとの関係性ですが、対応を誤ると、実際に大きな事故につながるケースが多くなります。

我が国で発生した大量遭難には、このような問題が起因となって発生しています。その典型的な事例を3例紹介すると、

- ① リーダーがパーティーと友好的な関係を維持しようとして、雪崩の危機判断を誤り、大量遭難につながったケース。(事例：那須雪崩遭難 2017.3)
- ② パーティーメンバーの一人が低体温症になると、その対応に気を取られ、他のメンバーへの対応がおろそかになり、さらに、多くの障害者を出してしまったケース。(事例：トムラウシ遭難 2009.7)
- ③ 曖昧な取りまとめリーダーのため、リスク対応ができず、パーティーが分解してしまったケース。(事例：立山遭難 1989.10)

2 様々な山行過程での判断のあり方

2.1 良い判断をするには

登山において、判断を必要とする行程には、山行前と山行中、大きく2段階あります。さらに、山行中に事故が発生すると、事故前から事故後にかけて重要な判断を必要とする差し込み行程が加わります。

これらの判断が正しく、正確に効率良く機能するには、パーティーメンバーの能力に応じて、登山前にしっかりと下見あるいはルートの上り下り経験に基づいた登山計画が作成され、下記ガイドライン(3章参考)をメンバーが理解し、納得していなければなりません。

登山の種類、難易度により異なりますが、リーダーとパーティーメンバーとの人数比などを決めた運行ルールや、環境保全、パーティーに参加するメンバー(保護者が必要な場合は保護者や組織管理者)との守るべきルールや指針、モラルなどが記載されたガイドラインです。

以下、山行前、山行中、事故前後における判断時の具体的な心構えをまとめました。

(1) 山行前の判断

山行前において、計画は、パーティーメンバーからの圧力を避け、安全な屋根のある場所で作成することが必要です。全員からの視線を浴びると、冷静な判断が難しくなります。

リーダーは常にメンバーの安全を考え、山行で生じるリスクを最小に考えていかなければなりません。そのためには、ガイドラインを理解することで、メンバーがリーダーの役割を受け入れ、了解していなければなりません。もし、メンバーに粗暴な言動、行動が分かれば、リーダーとして注意し、受け入れなければメンバーから外す必要があります。このような処置をメンバーに受け入れさせるには、山行前に、リーダーとしての役割を承諾させておく必要があります。

(2) 山行中の判断

山行中には、天候の悪化、メンバーの問題など状況の悪化は、様々な方向から確認してから判断する必要があります。十分な情報を得て、慎重に判断を下す。情報の確認と判断決定を同時に行うと、よくない選択をしてしまい

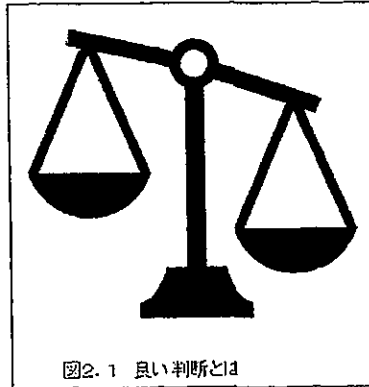


図2.1 良い判断とは

がちになります。さら決断するには、パーティーからの圧力(14.(2)参照)に対し、先入観が入っていないか確認する必要があります。

判断の理由について、メンバーに説明し、誤りが無かったか、そこからの反応を見ておく必要があります。また、あまり良くは捉えられていなかった判断も、話し合えば、受け入れられやすくなります。もし、経験のある人が加わって、経験的に拒否感がある場合は、潜在意識が危険の兆候を捉えているケースがあり、重視すべきです。

リーダーが自信を持って判断すれば、メンバーはついて行きやすくなります。

(3) 事故前後の判断

事故の発生前後に、リーダーは、最も難しく、責任の重い判断をしなければなりません。しかも、判断に要する時間は、短く限られています。



図2.2 遭難事事故例

事故発生前に、その兆候が分かれば、急ぎ山行を停止し、最悪事態になることを防がねばなりません。不幸にも事故が発生してしまうと、リーダーが、持参している装備で、即対応できるものであるのなら、十分に自己確保できる範囲でレスキュー活動ができますが、簡単に見えても対応できる事故は非常に限られている事を知っておかなければなりません。例えば事故が発生し、その対応に忙殺されても、リーダーは、他のメンバーをフォローする責任があります。

多くの場合は、警察・消防に連絡し、救助を要請しなければなりません。と同時に、停止したメンバーの安全性に配慮し、気温が低い場合は、パーティーを低体温症の発生を防げる場所まで退避させる必要があります。

このような判断と対応は、天候、パーティー規模、メンバー構成とその能力、事故の状況などによって異なります。勿論、リーダー自身が事故に巻き込まれる場合もあります。普段から様々なケースを想定し、対応方法を決めておかないと、厳しい環境下で、正しい判断をすることは、非常に難しくなります(3.4 緊急時の対応参照)。

3. 登山の行動

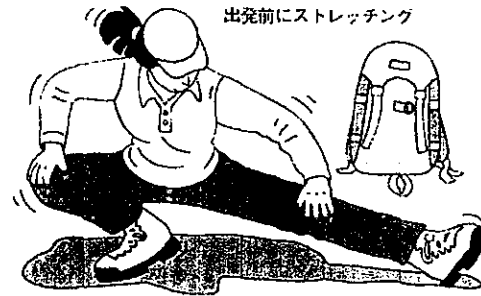
3.1 歩き始める前に

(1) 出発前に行うこと

①準備運動

歩き始める前に準備体操をしましょう。

まずは体をほぐして筋肉をストレッチし、血行を促進することで怪我の予防に努めます。



②体調確認

日頃の体調管理も登山の一部です。

年齢に伴い体力は低下します。山行に備えたトレーニングにより体力の低下を抑えることが大切です。

自分の体力を過信せず、自覚して行動しましょう。

③用便

出発に際してトイレは必ず済ましておきます。山中ではトイレはない場合も多くあります。

④衣服調整

歩きだして汗をかき始めると暑く感じます。衣服は少し薄着で出発の方がよい場合もあります。

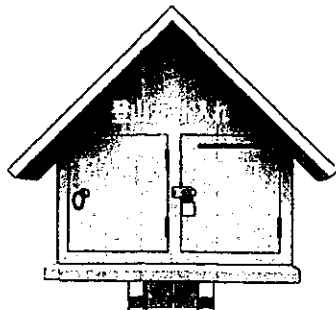
⑤現在地と標高確認

登山口など出発地点では標高が明確なことも多く、また地図で確認するなどして高度計保持者は標高をセットします。

更に地形図で常に現在地を確認することにより、道迷いを防止するよう心掛けます。

⑥登山届の提出

計画書を作成し、家族、留守本部、地元の警察署など(又は登山ポスト)へ提出します。

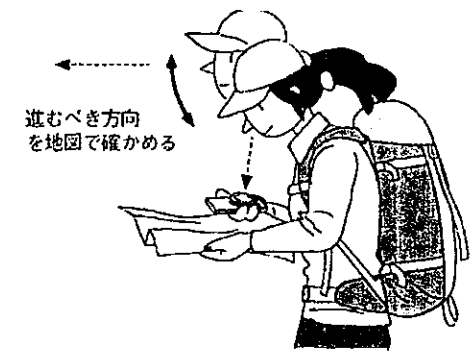


登山届ポスト

(2) 登山口の確認

衣服を調整して、さあ出発。どちらに向って歩けばよいのでしょうか。登山口に標識があるとはかぎりません。初めから間違った方向に進めば目的地に到着できません。

地形図を取り出して現在地を確認しましょう。そしてコンパスで進むべき方向を確認し、進路の道が間違いのないことを確認します。



3.2 歩き方の基本

(1) 疲労が少ない歩き方

歩く時は肩の力を抜き、背筋を伸ばし、あごを引いて少し前かがみの姿勢をとります。両足の間隔は握り拳分位開き、5~6m前方に目線を落とします。鞋底全体が地面に着くような足場を選びながら歩行しましょう。時々遠方に視線を送り、目標物を確認することも大切です。

不安定な石に乗って体をぐらつかせたり、木の根や岩角につまずいてバランスを崩したりすると疲労が蓄積されてきます。歩幅が広すぎると余分な力が必要になり疲労を早めます。また足運びのリズムが悪いのも疲れます。重いザックを背負い、長時間かけて登り下りするので、息切れをすることがない早さで歩きましょう。

(2) 最初の20~30分

歩き出しの20~30分はザックの荷重を感じ、身体が山登りに馴染んでいないこともあって体調がすぐには整いません。パッキングと共に最初からザックの調整が身体にフィットしていないこともあります。

スタートして20~30分は特にスピードを抑え気味に歩きます。そして最初の休憩で衣服やザックの調整などを行ってください。その後は歩く状況に応じて、少なくとも1時間内に1回の休憩を取りながら歩きます。休憩は時間を目安に取りますが、必ず安全な場所であることを確認してください。

(3) 様々な状況での歩き方

登山道には登り下りがあり、石や木の根が地表に出ているところや岩場や草地、河原など歩くこともあるでしょう。また沢を渡渉し、雪渓を歩くこともあります。平地とは違い変化に富んでいます。

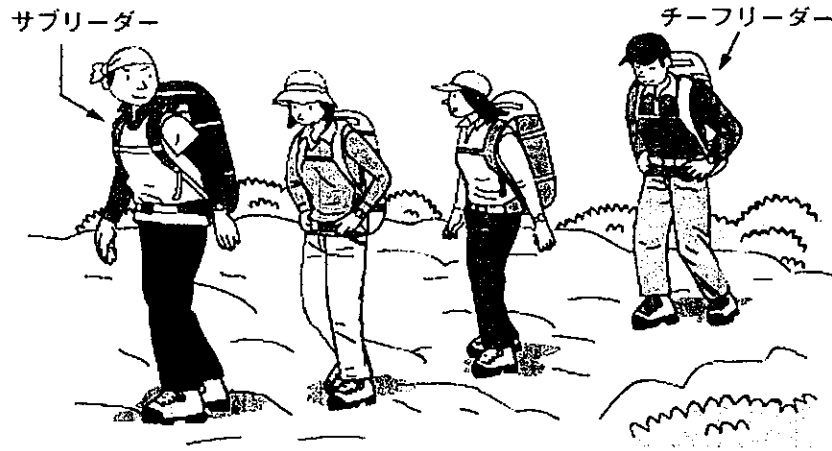
このような場所でも適した歩き方を知っていれば、安全に歩けると共に疲労も少なくなります。

(4) 歩く順番

歩きは始める前に歩く順番(オーダー)を決めましょう。トップとラストはサブリーダーかリーダーのいずれかが受け持ちます。トップはコースを間違いなく通りメンバーを導くとともに歩行スピードのペースメーカーの役割を担います。

オーダーの原則は足の遅い人や初心者等を2、3番目に配置し、この人たちが歩ける速さを基準として歩きます。後方には体力のある人たちを配置します。

ラストは全体に目を配りトップに適切な指示を与えます。また先頭のペースが早すぎたぎたり、不調の人が出たときなど、パーティーのまとまりを欠くようなときはトップに伝えます。



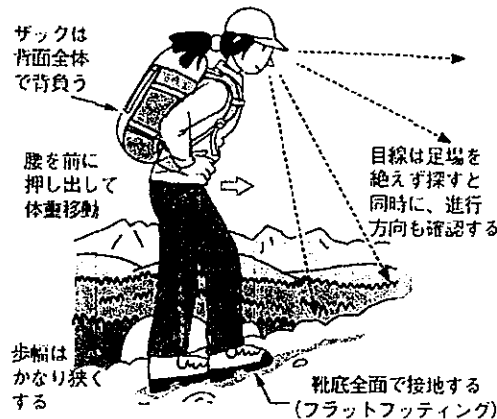
(5) 登降並びに各種地形による歩き方

① 登り

平地での歩きよりもかなりスローダウンして、歩幅を狭くし、一歩一歩踏みしめるように歩きます。

靴底全体を同時に地面に着地し(フラットフットイング)、体重移動を静かに行います。

やや前傾姿勢でザックを背面全体で支える感じです。



② 下り

山でのケガや事故が多いのは下りのときです。ひざや足首の関節に大きな負担がかかります。よく足場を確かめながら、ゆとりを持って下ってください。

ひざを曲げて靴底全体が地面につくよう踏みおろし、前足の着地と体重移動を行うようにします。危険な場所を下るときには、足場を一歩ずつ決めてから、腰を移動させるように、ゆっくり確実に下ります。

パートナーを待たせることに気をかける前に、自分の動作に集中し、スピードより安全を優先して行動して下さい。

③ 岩場

岩の形をよく見て、いちばん安定する形に靴底を置きます。バランスが悪いときは手で岩をつかんで確保をしましょう。

特に滑りやすい岩場は、三点支持(両手・両足の計4ヶ所のうち3ヶ所をしっかりと手がかり、足がかりにおき、残り1ヶ所だけを動かす)を行います。

恐いからと言って岩にへばりつくと、かえって危険です。岩にまっすぐ向って身体を岩から離して降り降ります。

④ ガレ場

浮き石を一面に敷いたようなガレ場ではなるべく傾斜の緩い平らな場所を選び、靴底全体で押しつけるように歩きます。

傾斜が急になったときはジクザグに登り降りします。大きな浮石に乗って転倒しないように注意してください。

⑤ 鎖場(くさりば)

鎖に両手でぶら下がると体が振られて、かえって危険です。また足場への注意がおろそかになってスリッパの危険性が高くなります。足場にきちんと立つことを優先させ、手がかりは必要最小限の力で確保します。ひとりずつ通過し、同じ支点間では複数の人が同時に鎖を持たないようにします。※鎖は支点にしっかりと固定されていることを確認しましょう。

⑥ 梯子(はしご)

一人ずつ通過します。土踏まずの部分でステップに立ちながら、きちんと手がかりを持って降り降ります。特に下りのときには後ろ向きに一歩一歩確実に降りましょう。



⑦ 栈道（さんどう：山の斜面にかかる歩道）

転落の危険箇所につけられていることが多くあります。栈道は湿っていたり、木が朽ちていることが多いため滑り易く事故になり易いので、ひとりずつ慎重に通過しましょう。

(6) 休憩のとりかた

① 休憩のタイミングと休憩時間

休憩の取り方は歩き方の一部です。全員の体調を見ながら適切な判断が必要です。休憩は疲労を回復させるのに必要です。

5分くらいの休憩を30分に1回、あるいは10分くらいの休憩を50分に1回程度とります。休憩の際には休憩時間を告げておくとメンバーはそれに合わせた休憩中の時間配分が出来ます。

急な登り坂の場合には休憩をとって鋭気を養い登りましょう。長い下り坂の場合は下りきったところまで休憩を取らず、一気に下りたいと思いがちですが、途中で適度に休憩をとりながら行動する方が安全です。

② 何をするか

休憩は時間が短いので、体温調整のために衣服を調整したり、ザックの背負い具合や靴ひもの調整などを手際よく行います。また、こまめに水分補給や行動食の摂取を心がけます。

また、地図で現在地の確認やこれからのルートを把握しておくことも大切です。

出発のときになってから慌ててザックを片付けて、出発時にメンバーを待たせることのないようにします。

③ その他

少しの間でもパーティーから離れる時はリーダーか他のメンバーにひと声かけてから離れましょう。誰も気付かずに、パーティーが出発してしまうと遭難の原因になることもあります。

(7) すれ違い

山では登り優先です。登ってくる人に道を譲り、山側で待ちます。安全にすれ違い、登りの人が同じペースで歩けるようにとの配慮ですが、その場の判断で下りを優先する場合もあります。危険な箇所では先に入っている人を優先します。



ガイドングについて

ガイドの役割

「人間社会と山、森林、自然とのつなぎ役を担うインタープリター(通訳者)である。」

自然に対する好奇心旺盛な参加者を目的の自然や森林に案内し、その素晴らしさを紹介、解説をして満足を与える事である。またその自然の中での活動を安全に遂行させることである。

そのためには参加者の好奇心を飽きさせない、案内するエリアの自然環境について広範囲にわたる豊かな知識と得意とする一点の並外れた知識が要求されます。その一点を二点、三点と増やす事で参加者の満足度を上げることが可能です。

合わせて安全管理の知識と行動中の健康管理や万が一の場合の危急時対応に関する知識と技術を習得する事が必要です。

必要な基礎的知識

- 1、自然環境保全について
- 2、気象について
- 3、生物について
- 4、地質について
- 5、スポーツ科学について
- 6、歴史や民族、経済について
- 7、森林や林業について
- 8、危急時対応技術

自然解説技術の基礎

自然解説において、1、解説する知識 2、その知識を効率的に伝える解説技術の二つが必要です。

いくらたくさんの知識を習得しても伝える技術が不足していると、より良い解説にならない場合があります。

- 1、参加者のニーズを知り準備を行う。下見調査が重要。
- 2、解説の基本技術
オリジナル資料を準備する。標高や年代などの数字やしゃべる内容を忘れないようにするため下見で得たデータを文書にして参加者に渡す。
- 3、見る、聞く、嗅ぐ、触る、味わう、の五感を活用し体験させる。言葉だけでは参加者の記憶に残りにくい。人間の感覚にインプットさせる。
- 4、楽しい話術を心がける。
メリハリのある会話。ユーモアを交えた会話、ジョークを交え参加者をリラックスさせる。
- 5、ジェスチャーを交え、体を動かしながら解説する。
動きを見ることにより言葉を理解しやすい。
- 6、サンプルを用意する。
木の実、木の葉、根、土、石、標本、それらの写真や映像等。
例)樹木の解説をするとき、木の実や木の葉などを見せると深い理解が得られる。
- 7、演出を行う。
例)あるポイントで解説する場合、そのポイントに到着する前から、その解説に関連する話題を展開し段取りを考えておく。
- 8、Q&Aを盛り込む。
問いかけやクイズ形式は参加者を引きつけやすく、飽きさせない。
ただし難しい内容は避け、回答は三択式にする。親子やグループ参加の場合はその中で回答を考えてもらう。
- 9、ドラマやエピソードを交えた解説。
歴史的なドラマや、人物を選び出し焦点をあて話しに盛り込む。
- 10、参加者に想像力、イメージをふくらませてもらう。
ガイドは五感を使い自然解説するが、さらに抽象的なイメージや想像力を働かせる。そのガイドングから過去や未来を想像してもらう。
ガイド自身の豊かな感性と発想力を磨く。
例)古道や峠道を歩いているときに戦国時代の武士や庶民の生活をイメージとして楽しむ事ができる。

解説の展開技術

解説の基本

大きなエリアから解説しピンポイントの説明に繋げてゆく。
六甲山全体の話から、今日歩くエリア、その中の見所ポイントへと展開する。

タイプ別解説方法

ガイド参加者にも多様性があり、多くのタイプの方が見られます。

個人、小グループ

参加者のニーズを聞き取って希望に合わせてやすく満足させやすい。

家族

最も年齢の低い子供に合わせた解説を中心に行う。教育的価値を求めているケースが多く、親の満足度が得やすい。
時により親へは説明を補足する事も必要になる。

団体への解説

多様な考えを持つ参加者で満足させにくい。
常に平等を意識して解説する。

- 1、歩く順番をローテーションさせ、平等に解説する。
- 2、視点をチェンジする。
同一場所でも視点を変えて解説し、できるだけ多くのニーズに応える
かつローテーションも行う。経験が労力を要する。
- 3、ガイドブックに載っているような大まかな内容の解説を行い、より多くの参加者に理解しやすいようにする。少しつまらなくなる傾向。
- 4、Q&Aを増やし、たくさんの方が質問しやすい雰囲気を作る。

教育旅行や学校団体の参加者

団体の解説に準ずるが学校などの希望や旅行会社が代理店の場合には十分な打ち合わせを行い希望に添うようにする。
低学年や幼児の場合是一緒に遊ぶと言う意識を持ち、子供の喜ぶ話題やゲームを盛り込み、褒めてあげ飽きさせないようにする。
また安全管理に十分注意する。

最後に

参加者はいかに楽しく過ごせるかに期待を持っています。
よりよいサービス性の強い案内が求められています。
それを満足させることにより、ガイド自身の満足度、技術も向上し
現代の社会的要請であるエコツーリズムの推進や環境保全等の役割に貢献
する事ができ自身の成長につながります。